『拾遺愚草』『壬二集』と異なる独自の本文が見える。この現象について、

ほのかにもしらせてけりなあづまなる霞の浦のあまのいさり火

をはじめとする順徳天皇の歌を中心に考察する。この注釈書の作成者が、被注歌の本歌と、和歌における頻用表現にこだわったことが、本文の生成に関わっていることを明らかにする。

さらに、前掲の順徳天皇詠が、帝の歌という意識によって本歌取がなされたことにも言及する。

≪中国学≫

『孟子』操則存舍則亡章について

茨城高等学校教諭　石原伸一

『孟子』告子篇上第八章には、有名な牛山の木の話が出ている。孟子はこの譬え話を使って、人間の本性が善であることを力説し、最後に孔子の言葉で締めくくる。「孔子曰、操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉、惟心之謂与」。この言葉は、心性論が議論の中心となる宋代明代の哲学者たちによって、自己の思想を創出・表明する手段として多様な解釈を生んで行った。

解釈手法は大きく二つに分けられる。

①心の不完全さを前提に修養論として読む。即ち心の出入りを防ぐ為に操心存心の必要性を説く。北宋の二程子（程顥、程頤）、並びに南宋の朱熹らが主張した、理学的解釈である。

②心の出入りを心の神秘的な働きとしてそのまま肯定する。南宋の楊簡、明代に下っては、王守仁、王畿らが主張した、心学的解釈である。

解釈史はこの二つの解釈が主流となって、両者のせめぎ合いの中で綴られて行く。今回の発表では諸説の解読を通して、哲学史の流れを検討しながら、合わせて朱子学、陽明学の思想の特質について考察してみたい。

晩唐五代における韓愈と賈島の評価

――物語が生まれる瞬間

博士後期課程二年　益西拉姆

賈島と韓愈の関係は「推敲」の故事によってよく知られるが、前回の発表において、その故事が実在しなかったことに言及した。とはいえ、両者の関係は賈島研究において避けて通ることのできない重要な問題点であり、なお検討すべき問題は多い。

両者の関わりを語る現存資料はわずかしか残されていない。信憑性の高い資料は賈島の別集に収録された韓愈に送った詩五首と韓愈が賈島に送ったとされる二首の詩だけである。それ以外には、信憑性の疑われる『鑑戒録』と『新唐書』の記録があるのみである。

本発表では、晩唐五代の韓愈評価という視点から、韓愈と賈島との関わりについて考察する。韓愈は生前からエピソードに事欠かない著名人物であった。しかし、その評価は主として、復古を主張し、古道を実践する儒者・古文家としての側面に集中しており、詩人としてのそれは、不遇な同輩・後輩詩人を熱心に推挽したという点を

除くと、あまり語られることはない。晩唐五代において、韓愈はなによりも堂々たる儒家的士大夫であり、不遇な知友や後輩を推挽する救世主のごとき文壇の領袖として語られている。一方、彼の個別の詩歌作品に対する影響や反応はほとんど見られない。

この点を賈島と比較すると、見事に好対照である。賈島の伝記的エピソードはほとんど虚構によって固められているが、作品は晩唐五代の時代、確実に熱狂的に支持され多大な影響力をもっていた。こういう好対照な両者が堅く結びつけられたのが、『鑑戒録』の生まれた五代である。この事実の意味することについて、本発表では韓愈と賈島の両面から考察する。

並木栗水による三島中洲批判

本学21世紀COEプログラム研究助手　岡野康幸

明治十九年十月十日、本学学祖三島中洲は学士院会館に於いて「義利合一論」を講演する。その内容は義（正しさ）と利（利益）は本来一つのものであり別々ではない。後世宋儒によって義と利が判然と二つにされてしまった、という主旨である。そしてこの考え方は中洲自身により「脩身衛生理財合一論」と展開され、また中洲と親交のあった渋沢栄一により「道徳経済合一説」として発展していった。そして研究の上でもこの三島-渋沢ラインはそれなりに今日に於いても研究されている。

しかし、この「義利合一」という主張に真向から反対する意見に対する研究は、管見の及ぶ限り無きに等しいと思われる。

本発表で扱う並木栗水（一八二九～一九一四）は、この中洲「義利合一論」に正面きって反対した漢学者である。栗水の意見によれば義と利は別々のものであり、中洲の主張は「人欲ヲ認メテ天理トスルモノニテ、功利説ヲ主張シ、以テ時好ニ投ツルニ過キサルノ論ナリ」（『義利合一論辨解』序）として反論する。

本発表では並木栗水『義利合一論辨解』を通して、栗水・中洲の義利認識の相違を浮かびあがらせていきたい。